

日本陶磁史研究における美的対象としての「桃山茶陶」の位置

末吉佐久子（関西大学）

本発表の目的は、日本陶磁史研究における美的対象としての「桃山茶陶」の位置づけを再考することである。木田拓也氏の研究によれば、1930年代の日中間の緊張によるナショナリズムなどを背景に、桃山陶芸（茶陶）は、「日本独特のやきもの」と位置づけられていったという。本発表では、これとは異なる美的対象という視点から、その位置づけを考察する。

茶陶の視点から見れば、室町後期から江戸初期は、書院茶から佗数寄の茶の湯への変化および、それに伴う茶人たちの美意識の変化によって、唐物賞翫から高麗茶碗などの舶来陶磁へ、そして和物へとダイナミックに移っていった時代であった。

そのような流れの中で「桃山茶陶」は創出された。「桃山茶陶」とは、極めて大雑把な言い方をすれば、安土桃山時代を中心に展開した「佗数寄の茶の湯の美意識が反映された茶陶群」である。それらは、志野、織部、瀬戸、備前、伊賀、信楽、唐津、萩、そして樂などを中心として構成される。

日本陶磁研究の萌芽は、明治時代初期であり、この時期を起点として日本陶磁史の概説書や総論が執筆された。注目すべきは、ジェームズ・ロード・ボーズ（James Lord Bowes 1834～1899）が、この時期に西洋的な美術史の立場から、日本の陶器を捉えていたことである。1881年に出版された『日本の陶器美術（Keramic Art of Japan）』は、陶器を美術として把握し、陶器を通して日本の美を語ることを目的とした書である。またボーズは『日本の陶器（Japanese Pottery）』（1890）において、「装飾的なやきもの（decorated wares）」と「非装飾的なやきもの（undecorated wares）」を対比させて、日本の陶磁器美術の特質を論じている。後者には、後に「桃山茶陶」とされた古瀬戸藤四郎茶入、薩摩焼茶入、黒樂茶碗、唐津焼茶碗、瀬戸黒茶碗が挙げられている。

大正5年（1916）には、古陶磁鑑賞の学術的方法を目指し、東京帝国大学の学者を中心に陶磁器研究会が設けられ、その延長線上に彩壺会が生まれた。その中心人物の一人であった奥田誠一（1883～1955）は、「茶器の鑑賞に就て」（大正7年・1918）で、「景色と云ふのは形や色の上の變化を意味するので、或は一種の表現を指すもの」と述べ、陶磁研究者として日本の陶磁器について美的鑑賞という立場から研究を始めた。

このような流れの先に、昭和5年（1930）、美濃・大萱で荒川豊蔵（1894～1985）によって志野焼の陶片が発見され、加藤唐九郎（1898～1985）ら近代作家による「桃山茶陶」研究へとつながっていった。

以上を踏まえて新知見を述べると、荒川以降、「桃山茶陶」が美的対象となったことについては、ボーズと奥田の姿勢が決定的である。つまり、ボーズの西洋的な美術史の視点や奥田らの近代美術の「表現」という視点によって、美的対象として研究の俎上に載せられることになったのが「桃山茶陶」であった。